

kurenai

51

關門 ト ン ネ ル	山	平	白	近	難	池	桒	中	田	山	田	大
		田	須	藤	波	田	中	島	中	口	田	和
	口	信	義	惠	禮	道	清	和	克	克	信	通
	實	子	和	子	二	夫	市	子	己	實	己	信

昭和二十五年九月一日發行
 『くれなゐ』 第五十一号 印刷所 朝日堂 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町西山 吉川富治郎 發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二
 くれなゐ發行所

長崎旅情 (その二) 山口 實

この夜あけなば明日は伊萬里にかへるとふ女と酔ひてかなしみはなし
前髪の銀のかんざし燈の下に眩しげにしてほほえみしひと
丸山の白肌をとめいだけて心かかやきたまひと夜ねつ
雨後の港の笛を聞きつつ君のむく林檎の紅皮は眼に沁む
ほとほとにせつなくなりてトランプの女王の札にわが涙落つ
船のマストにかがやくけさの萬國旗はためく色をなほ見んとする
あどけなき声に戀ふれどぬばたまの夜の君をかなしむ
嘆きつかれしわれのまなこの前にとまる蒸気機関車の大なる車輪
色箱に隈なく照れる月かげを見をさめてひとり石坂くだる
慶長二年二月はじめにわが墓ふブラステス神父も槍に刺されき
浦上の雨にけふらふ晝空にサンタマリアの鐘鳴りわたる
藍の雨こまかにふれる長崎の冬の島嶼の風は身に沁む
イエズスの油彩の像の前にたち聞きしはマリアの鐘の音とおもふ
しみじみとよみがへりくる儂さよ白きマリアの御眼にむかへば
旅のやどりの夜半にうかびし初戀のせつなかりけるひとの面影
戀ふらくは出島に古りし蘭館の壁にた射す寒き夜の月

大和通信 堀辰雄氏に 田中克己

その後お休みががですわ
お見舞い出来ないうちの中
に、話が出来た大和の國へ
来てしまひました。あしび
の花の咲く時期は、もうす
ぎてますが、これからい
ろいろとこちらの景色をお
しらせして、御丈夫になつ
てお越しになる日をお待ち
することにしたましよう
大和の國は私も十年ぶり
です。それに今度住むこと
なつたこの町は高等学校の
三年の時以来です。二
十年ぶりに近いのです。
七月の終りに家をたのみ
に友だちの所へゆく氣にな
り、駅からいかにげんに歩
いてゆく中、さるすべりの
咲いてある辻まで来ると、
はじめて、あ、この花には
見覚えがあると氣がつき、
めあての家をたづねると、
すぐそばでした。変なこ
ろに記憶はひそんでゐるも
のですね。こんな調子で、
これから自分の記憶をさが
しにまはらうと思つてあま
す。けふは御挨拶をかね
見舞まで。
二
追分の御様子いかがです
か。落葉松の林の中の道を
送つて来てくれていつまで
もこつちを見てゐたのは立
原君でしたか。お散歩など
しておゐるでせうか。
こちらに來て一週間にな
ります。野菜の統制とかで
買ひだめの玉葱と唐辛子ば
かり食べてゐますが、幸ひ

ゆふだち

田中克己

わが心ゆふだちのごと霧れてのちふくまぬさがときみ知りたまへ
ともに死ぬさだめならすと父母を置いて來る氣のなきがかなしも
スマトラのうみべをゆきてふるさとを思ひしころといまといづれぞ
比良山のふもとをめぐりわかれ來しなれを思へばみさごとびかふ
夏草にまじりて咲けるひともの青き花にぞなれをたぐへし
とこしへにかはらじといひなれが眼にすなはち泪わくを見しはや
乙女をもこの喜びを知らで在る哀れさやいま涙し過ぎぬ
サポテンの花のみ一つ真白きと庭に在るなりいさかへる夜は
たはれ女の刺さるややく吾に示す君が心のはかられなく
戀といふその苦しき夕べにはかそけき靴の音にもおびゆる
君が愛をこの一点に止め置かむては一つ死のみと思へり
限りなき負担に今を疲れつつ俯向きてゆくはつあきの道
初秋の道 中島和歌子

秋やま

埜中清市

あををと澄みきはまれる山の上の空にはかへれ稚きおもひで
流れに沿ひて秋は七つの色に咲く花をもとめてゆきし日の夢
笹の葉のさやける山に妻子つれ登ればとほくゆく秋の雲
高く低くつくつく法師のなく書を木の間も光ぐりゆきしか
國のはてに沈む夕日の影は濃く凌霄花の色したたりぬ
秋風はすそより吹きてもん白にかける夕日ををしみつるき
雑木林のかげにたはむるもん白にこぼるる夕日揺れやますけり
返り咲きの山吹の花咲くあたり揚葉もん白多くあそべり
赤松のかげなる藪に來て遊ぶ秋の小鳥に吹く風ありて
栗のいが小さくかがやく山路來てとほく入る日を妻子と見つる
赤松のあかきはだへに寒蟬のなき交すときの遙き明るさ
山峽の水の流れにさく花の露草つみて妻子とくだる
こぼろぎの鳴く夜をくにに歸り來て黒土にひくきわが影を見る
女郎花かめに投げ差し壁紙の白きあたりに寄せてねむれり
ぬば玉の夜半の枕にこぼろぎの鳴くねはかよふ母なるくにに

門司に汽車の着いたのは
夜の十一時頃であつた。月
光は皎々とプラットホーム
の敷のレールを照らし、
海際の埋立地につづく黄色
の黒つんだ砂地にもかがや
いて、僕の眼にはいささか
北面の方に高い丘が感じら
れた。對岸の海を越えて本
土の燈は透明のレモンの色
に點滅し、その清らかなま
でのきらめきは、手にとつ
て愛惜したいやうな氣持を
おこさせるのであつた。僕
の主観は全力をふるつて、
矢のごさくその燈のかがや
きに觀入してゐたのは云ふ
までもない。
往昔たしかこの門司に近
いところに美劍
士藤流佐々木小
次郎が武藏のた
めに頭をさくろ
のごとく砕かれ
て死んだ舟島が
ある筈だ。いく
ら武藝の試合で
も敗れて死んで
ものの方に同情
だ。小次郎があ
はれむ心がしら
しらと流るる寒
水のやうに僕の

關門トンネル 山口 實

急進にきいた。連力は
におぼるげな虹を形づくつ
て瞬間僕の眼をかすめるの
であつた。眼をつむつて、
その虹の輪が眼底にくるく
るとまはりはじめると今
にして感じられ、強烈な印
象としてよみがへつてくる
のである。
海底トンネルの半ばを過
ぎてしまふと、車体が若干
動揺し上昇するのを感じら
れた。壁より流れる海水は
レールの溝に小川をな
して光を碎き乍ら、流れ去
るのが、今また眼に見る様
に思はれる。
電氣機関車の警笛が二つ
ばかり鳴つてより、五十秒
位の暗黒の刻を経て、遂に
機関車はトンネルを出た。

三界 池田道夫

わが庭の土にさしゐる陽のかげのあはきちからと想ふしづけさ
力よわりてわがすねによる蚊なれば脚もたよになほ刺さむとす
心まざるるすべもきはまりて苦しき上糶のため今日も行かねばならぬ
朝清きわが庭にして涙落つ白萩の花三つほど咲けば
あらしすぎてまばらになりし虫のねをきそ夜に聞きて今朝のわびしさ
ものなべて悲しきほどに忘れぬ三坪ばかりの蓮池なれば
いくたびか立ちくらみせし夏すぎて夢さめしごときよき流れのほとり
夏ごよみ 難波 禮二
午後二時空まかやく汚れたる白犬に似て街ゆく人ら
手をばつき笑みをふくみて見送れる女童らしきしづきふれぬ
書香き夏の日なれば道のべのあざみの花の色さびしけれ
吾いつか世俗になれてあり経しやゆたかに涙流すことなく
生きつぎて斯くも虚しと仰ぎみる空に白じら銀河冨えたり
急ぎ足に夏は更けたり生活のおも苦しさをのがる術なく
年々に経ゆく季節の断面かあかねの雲を風の流して
ほのかなる夢をみつれど幾ときを激しきバスの揺れにまかせて

崩れる日

近藤惠美子

燃えるたるわが血わが胸わが心崩るゝときはあひみだれつ
鶏頭の紅牙えまさる雨の日は狂ふいのちのなほ燃ゆるがに
この思ひ誰にか告げむ夕暮れの林に入りて泣きにけるかも
あたりみな音しづまれる暗き家にしのびは泣けどいやまさりける
物おもひはてなき日なり夕月のとどろ窓べに更かしけるはや
落日は強く眸にしみつきて山河はただに黒く疲れたる
荒々とどぶ板ふみて我はゆくごうにもならぬ明日を背負ひて
眸に溢るる蒼穹の碧さに挑むがに日は白々と照り返すなり
君と來し堤の水の色褪せて一ひらの雲ゆるく流れぬ
複雑な思ひをもちてのがれ來てみんなに分けんと夕陽に立つ
夏の雲なだれてただに炎えてゐる夕べの空に向かひ立つなり
ただならぬ青野の風のなまぐさく斜に通る白き道を吹く
苦惱の果て 平田信子

くれなる雑記

▼作歌は信仰の如きもの
である。「ただ念佛して彌
陀にたすけまひらすべしと
よきひとのおほせをかぶり
て信するほかに別の子細な
きなり(中略)たとひ法然聖
人にすかされまひらせて念
佛して地獄におちたりとも
さらに後悔すべからずさふ
らふ」とは親鸞上人の有名な
言葉だが、作歌もただ迷
ひをのりこえて、ひたすら
に作ることのみしか方法は
ない。ただ作つてゆくうち
にのみ迷ひが去り、新しい
発見が見られるのである。
歌壇を見よ。歌を迷宮にお
し込んで自らの妄言に自ら
くるしんでゐる歌人たちが
如何にその作歌に於て低劣
であるか。

kuromai

52

美の範圍	加藤英之助	山口實	近藤惠美子	中島和歌子	難波礼二	池田道夫	田中克己	埜中清市	大和通信	田中克己
------	-------	-----	-------	-------	------	------	------	------	------	------

昭和二十五年十月一日發行
 “くれなる”
 第五十二号
 印刷所 朝日堂
 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町西山 吉川富治郎
 發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ二一
 “くれなる”發行所

秋の潮 壁 中 清 市

二見より見はるかす北の海うみはかすめることし秋ふかみかもし
いま満つる潮のひびきをただにきき波止場に立てば秋の海渡し
黒しほの流れとおもへ伊勢の海の秋のうしほを今見つるかも

飛行機

戦ひのさまは朝夕にきかされてゐるにわが子は育ちゆくがね
かたことこのいづつかおぼえ食膳に寄る子をみればなごまるなり
五つ六つ七八つ歩き母にゆき父にみる子の前歯をろへり

嵐

屋根瓦風にまひとぶ眞晝にてあぢかも我のこころさやけみ
べうべうと吹き荒ぶとくに舞ひ上る屋根瓦みつつうなづきてゐぬ
夕ちかく嵐は去りぬ外に立てば鶏頭あかきあはれうごかす

大和通信 堀辰雄氏に 田中克己

田中住ひしてゐますと、一番うれしいのは手紙とお
客です。けふ昔の教へ子が訪れて来ました。中学で教
へて、東京の大学へ入つてから、阿佐谷に下宿を見つ

加藤英之助

美の範囲

銭形半次捕物控が上半期のベストセラー
の一二位を争ふ賣行を示したと云ふ
事実は、アララギが歌壇の主流をなした

秋の日

難波 礼二

高原をなべてま青き秋の日の光りさびしきは告ぐべきならず
さらさらと風にゆれる草の質のほろほろこぼるる秋かざりなし

折々の歌

山 口 實

石山の月の夜ふけをさびしき白木紬子は旅に死ににき
美しき象徴風の言葉にて君は語りき石山寺の縁起

秋風

田中克己

酒のますをみないだかす早くねて生きむといひし友をおもふも
めぐらせる蓬生に啼く秋の虫いつまでならびあらむふたりぞ

ひときぎの後にはくるしきいのちぞと今は思はじコスモスの花
かうかうと月に啼きゆく鳥ならばいのちみじかきもまた清しきに

舍利

池田道夫

黒ん坊の書いた「ポルト
レ」からインスピレーション
を導いて「肖像画を描く

文法的用法で陳腐な寫実主
義を奉じてある眞実、赤裸
々な自然の構造に向つて混

日本歌人新人十人集「近刊」

悲天 池田道夫
疾風怒濤抄 山口實

くれなゐの歌風を阿闍する二新人の出詠。予約受付。
希望者は直接著者へ、又はくれなゐ発行所へ申込乞ふ。
日本歌人叢書 京都市烏丸五條下ル
国際文化協會出版部
定価 ¥200

kurenai

53

寒林私語(二)

池田道夫

白須義和

近藤惠美子

中島和歌子

難波礼二

埜中清市

田中克己

山口實

大和通信
田中克己
池田道夫

昭和二十五年十一月一日發行 『くれなる』 第五十三号 印刷所 朝日堂 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町西山 吉川富治郎 發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二一 くれなる發行所

石 路

池田 道夫

石路の黄色き花の濡れたるをこの土の中の母にまらさす
妹の嫁ぐ朝けを見者吾れ書齋の中に呆然とせり
妹が一世の奢りマダグネシウムは金らん緞子のその帯照らす
朝雲の綾なすなべにひむがしの高嶺をさして鶴鳴きわたる
妹を置き急げば轟然と貨車をつなぐ音夜窓にひびく
妹を遠く嫁かせし夜更けてしむじみと降れば紅葉するらしき
朝露は午近くしてまだ干ねば紅葉散らして啼く鳥のこゑ
ゆく秋を物がなしらに狂ひ咲く櫻を見つづ遠去なむとす

大和通信

堀辰雄氏に 田中克己

九月二日から勤めがはじ
まると、毎日汽車で通勤し
てゐます。八時の汽車に乗
り、三輪、柳本、長柄、丹
波市と四つから、三十
分ほどかからない車中の時間
ですが、この柳井線といふ
のは、昔の山邊道に沿つて
ゐますので、車窓から見
景色にもいろいろと考へさ
せるものが多くてのしい
です。櫻井を出るとすぐ初
瀬川をわたり、三輪に入る
手前で、右手三輪山ふも
とに沿つた村は、むかし
海石橋市、いまは金屋とい
ひます。むかし、友だちに
案内された時、谷間の
石佛のことは今も忘れてゐ
ませんので、また一度ゆか
うと思つてゐます。

寒林私語

(一)

池田 道夫

(一) 鑑真和尚像
唐招提寺で鑑真和尚像を
見た。二十ばかりの石段を
上り、小さな門をくぐつて
靴を脱ぎ、礼拝をして静か
に扉帳の中をのぞき込ん
だ時、奈良の博物館で案外
手間取つたことを悔いた
四畳半程の開山堂の中には
もう早や夕ぐれの薄闇がこ
もつてゐて、さらでもほの
ぐらい扉帳の中は僕の眼の
焦点をしばしば迷はせてし
まふのである。それでもだ
んだん眼がなれてくるに従
つて、先づ像の全体が一面
うす黒くすすけてゐるのに
気がついた。法衣の朱も袈
裟の緑もそれとくすかにう
かがへるのみである。深く
くぼんで静かに閉ぢた眼と
かすかに微笑をたはへた口
元も、寫眞で見てゐた程印
象的には追つて来なかつた
しかし、かうしてしみじみ
と凝視してゐると、不思議
にそこの一面に古風なおだ
やかなものが動くとともに
深つてゐた。

灯

中島 和歌子

こまごまと金木犀の散りしを窓に見てゐるしうつろの心
既に遠く離れし吾子をなつかしみ金木犀のはららに散る庭
らふそくのあかり家うちのひろびろと停電の夜をわれ一人坐す
その人の死にたるへやに灯をともし戸の鳴る音を聞きすまし居る
この部屋に待つわれあるを同じ時酔ひたはむる君と思へど
停電の夜はひとしほに大阪のあかるき街の君を想ふも

秋 蘭

白須 義和

あかめい屏風のかげにす
わつてあなをのしづかな
寝息をきく。
香爐のかなしけむりの
やうにそこはかとたま
女性のやさしい匂ひをか
かみの毛ながきあなたの
そばに睡魔のしぜんと言
葉なき
あなたはふかい眠りにお
ち、わたしはあなをの夢
をかかふ。
この不思議なる情緒
影なきふかい想ひはどこ
へ行くのか。
薄暮のほの白いうれひの
やうに、はるかに幽かな
湖水をながめ
はるるるさみしい麓をた
どつて見しらぬ遠見の山
の時に
あなたはひとり道にまよ
ふ道にまよふ。
例へばこの詩に見るやう
な抒情は、不思議にしづ
りと落つて古風ではない
か。人はこれを幽玄とも寂
とも云はうが、僕はこれを
古風と云ひ、この古風とい
ふ言葉をこよなく愛する。
もう少し例を短歌に挙げて
みよう。
しのめゆの空ゆくとき
のちならば光を添へむ
手つたはせくれ
山のぼり切なく思へば
はるかにぞ暈照の湖青く
死にて見ゆ
さざれ石敷きつられ清き
水底に歩み入る朝ぞ花散
りしきれ
ゆく春は鳥の抜毛も悲し
きに白く落ちて早や飛び
去りぬ
共に昭和前期の産みの親
と云はれる前川佐美雄氏の
作品。その新しさに於ても
萩原氏と共通するところが
あつたから採つたのだが、
この一首目、三首目などは
特に初稿目も不思議と古
風な味がないだらうか。萩
原氏の云はれたやうに感傷
偏重の軽薄さもなく、観念
的なく重くしきもなく、し
つくりと落つてゐて、し

寒冷地

田中 克己

冬近き山べを見れば泪おつとこなつのくにゆくすべもなし
いましばしばしととどめ西山におつる日見ればさらに得とめす
ひとあまた山のあなたにたつどひつづつ我がめづる子に言聞ふらしも
海へだて住む日かなしみわがた人泪おとしてゐたる子らばも
北平にわがゐるしとよめにゆめに見し青衣をよめにけふぞ會ひぬる

黒き潮

壺 中 清 市

秋ふかき一夜海べにあそびむと来つれこよひのすぐ荒れたる
肌にしむ夜半の濱べや潮風にみひらく眸にうつる灯もなし
すでにして行き著く濱と思へやもなほゆけど波の重くたたみ
潮みちてくろく荒れたる秋の夜に吾はゆくべしや濱つづくほどを
寒ければ襟かきよせて黒潮にま向へば海の底ひびく音
松の幹大きくゆれて影おとす月の濱べのそぞろ寒さよ
波一つひびけば二つ三つ揺るる月の松かげふみしめてゆけ
風つよく海荒るる夜ぞさらさらにはける白き砂は深しも
黒き岩くろくき渚に並びたり月たかければ濡れて光れる
沖に立つ白き波間にきらめきて月しろしあやに隔たりてみゆ
夜の海の寒きに立てば海と空つらなるほどはかなしかりけり

赤目溪谷

難 波 礼 二

瀧の音の絶ゆる間あらず天明の秋に溶けては見るしろき雲
岩に居て見れば千尋の淵すみ静かにも光り湛ふるあはれ
紅葉に人はひとりの秋のいろながれいづらの涙と説くな
常滑の岩も木の根もぬれたれば明日を夢に見るよりもげに
古のゆかりの人を見わすれしここに更に飛泉ながめぬ
軽石のかるきを踏めばふみ崩れくづれつづくが秋のゆふべに
人の世はかすならねども何鳥か夕日に啼きてやがて消えにし

象派の詩に見る如き官能
の耽溺的靡乱がない。或
ひはまた重醇にして息苦
しき観念詩派の圧迫がな
い。むしろ私の詩風はあ
だやかにして古風であ
る。これは情愔のすなほ
にして殉情のほまれ高き
を尊ぶ、まさしく浪漫主
義の正統を踏む情緒詩派
の流れである。
と云つてゐられる。しか
し乍ら氏の詩風はたしかに
当時の詩壇をはるかに離れ
た実に新しいスタイルのも
のであつた。

—日本歌人新人十人集(近刊)—
天 池田 道夫
疾 風 怒 濤 抄 山口 實
くれなるの歌風を両断する二新人の同録。予約受付。
希望者は直接著者へ、又はくれなる発行所へ申込をふ。
日本歌人叢書 京都市烏丸五條下ル
定價 ¥200 国際文化協會出版部

命じて「内密に慇懃(みん
超えん)を興し、方に世を
つて歸ると雖も、心は常に
山林に留る。猶し繁ける狂
象の、常に曠野に遊ばんと
念するが如くであつた。
勿論佛陀のゆかれた道と
り一首としてはかかる上品
な古風をなすつくりとた
よはしてゐなければならぬ
と思ふのである。
山門を出てしばらくゆく
と、とある農家の土塀の上
にひらぎの花が白々と咲
き盛つてゐるのを見た。
僕は肩や手に粉雪のやうに
散りこぼれる花のむせかへ
るやうな香に酔ひながら小
さな枝を一本折り取つて大
満員電車におさされて、惜し
い事に家についた時には、
そのいたいたの葉もへしや
けてゐて、勿論花はすつた
りこぼれ落ちてしまつてゐ
た。
(二) 出城品の一節
「佛所行讚卷第一」の「出
城品」は白淨王が太子の釋
尊に「厭世の想を生ぜしむ
ること勿らしむ」の爲に、
盛に華麗な園林に遊ばせる
ことを企てるが、かへつて
淨居天の爲に逆効果を生ぜ
せしめる結果となり、最後
「路傍の耕人」が「裏を糞
じ諸虫を殺す」を見て「其心
悲憫を生じ、痛むこと心を
刺貫するに踰え一。時に
淨居天、比丘の形と爲つて
現れ、釋尊の「汝何人ぞ」
と問はれるのに對して答
が仰ぐ。一。是は沙門な
り。老病死を畏懼すれば、
出家して解脱を求むるなり
衆生の老病死は、變壞(へ
んえ)暫くも停ることなし
故に我常樂を求む、無滅亦
無生。怨親平等の心もて、
財色を務めず、安んずる所
なれば當む所無し。塵想已
に息み、蕭條として空閑
(くうげん)に侍る。
それを聞かれた釋尊は遊
園の心もどかか、「止つ
て遠く逝かされ」と御者に

くれなる雑記

〇年の瀬も近くなつた。虫
の聲も絶えてしみじみと
病葉のちる氣配がする。
年を越すのちのひびき
である。
〇新人十人集にわが池田、
山口両君の作品が投じら
れた。これ実に、更に
くれなるの眞意を示
すものである。そして明
日への力に備へるもので
ある。新世代歌人の地歩
をみつめられんことを。

kuunenai

54

寒林私語(二)

池	難	新	岸	吉	白	山	田	埜	加	平	池	田
田	波	井	田	田	須	口	中	中	藤	田	田	中
道	礼	康	エ	辰	義		克	清	英	信	道	克
夫	二	彦	ミ	雄	和	實	己	市	助	子	夫	己

大和通信
作品

昭和二十六年一月一日發行 『くれなる』 第五十四号 印刷所 朝日堂 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町西山 吉川富治郎 發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二一 くれなる發行所

紅葉 莊 嚴 池 田 道 夫

茜さす夕さりくれば其行林の佛陀の肩に紅葉散りつつ
しるがねの光を放つ多寶塔をうつつ空に戀ひつ死にし
黒潮をわが見るときに紀の國や潮の岬に雪にかくれつ
くらがねの巖をさきてしみ出づるほそきいで湯は砂にこもりぬ
しみじみと湧き出る湯ゆえ地深きほのほのほにほ立つるかなし

青き湖 (九首) 平 田 信 子

美しきアイヌの戀の物語り秋雨の夜にききけるかも
月の夜の青き湖へのこしたるかなしきまで美しき戀
月の夜の青き湖上を漕ぎ出づる少年の笛の調べ聞ゆる
月の夜の音の音色や妙なりし湖上の舟の少年を憶ふ
さえやえとまなかにひきつる影二つその青き夜の湖を思ふ
月の夜の眞青き湖に消えゆきし二つの影を羨しと思ふ
笛の音は聞えずなりて月の夜の湖上に残る一その舟
月の夜の湖のあまりに清き物語りききつることを悲しと思はむ
月の夜の北海道の湖深く秘めし清浄の戀なりしかな
果てしなき孤獨の思ひすべなれくづはれて君に依りゆかむとし
訪ねこし若き女なれば悲しきを君には言はず帰りにけり
はらはらとプラタナス散る朝なりき堪へむと思ひさびしかりける
青澄みて雲一つなし如何なればこの秋の陽の胸に刺さるを
迷はずに生きゆく思ひ定まりてめぐり静かに秋は深し

天使の靴 加 藤 英 之 助

指先をかすめる白い鳩のむれに焦立ちて洩らす苦き歌なり
白いノッブ手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり
ネットワーク手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり
ネットワーク手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり
ネットワーク手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり
ネットワーク手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり
ネットワーク手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり
ネットワーク手垢にまみれなまぐさくこの夜の他の君を思へり

雄叫び 壺 中 清 市

りんどうの花もすがれて雲疾き秋山かひを馳せのほりゆく
田面には今更なる朝日がやけし稻架つづく果ての雄叫びの声
叫びあぐる何かは知らねいさほへば遠山かけて霧はれわたる
怒りたる修羅にも似つれ葉を踏めばかなしよこの深きわくら葉
疾風吹く山いだだきに石を投げ石投げれども秋はかへらす

大和通信一堀辰雄氏に 中 克 之

毎日ひとく破れて歸つて 来るか 御
想像もつかないと思ひます ので、一寸説明して下さい
降る降る、丹波市の驛で 降る降る、丹波市の驛で
降る降る、丹波市の驛で 降る降る、丹波市の驛で
降る降る、丹波市の驛で 降る降る、丹波市の驛で
降る降る、丹波市の驛で 降る降る、丹波市の驛で
降る降る、丹波市の驛で 降る降る、丹波市の驛で
降る降る、丹波市の驛で 降る降る、丹波市の驛で

寒林私語(その二) 池田道夫

偶感
俊成卿が、古來風物抄で 歌と天止観とをその長い 傳統に於て對比したことは 決してない。しかし止 観がその頃の世を支配した 最高のものであつて、当時 のインテリの等しい學ぶ 者の多くあつたといふ他に 歌を三昧の行とし、新しく 「道」として見直すに至つ た由縁をその頃の社會情勢 から深く考へてみるにや

太平の世に歌はれた古今 集が、その表現技巧は範と して承継されても、どうし てその精神等には安住し 来ず、新しく自分達の國と して、新古今集の世界を築 き上げねばならなかつたの だ、申すまでもなく嚴肅な うつし世の交戦中であつた 源平二氏の戦ひは、對立の かげに空しく葬られてゆく 人の命を想つてゐたのであ る。無情な無常相を見せつ けたるときに、誰も永 遠不滅の理を想ひ、無常の 中に不易の道を慕つて浄土 への「いせき」の言葉を唱へ 合つた。まして時代の裏に むなく忘れられゆく自ら を歴視してゐた上人たち とつて、また再びと「去 年とやいはむ今年とやい はむ」の遊戯は夢にだに出來 なかつたのである。彼等の 眞實に希つたことは、ただ 永遠に他によつて乱される ことなき、自由な、そしてそ の故に自らの命を賭け得る 第二の樂園であつた。彼等 はそこにあつて荒れゆく世 を靜かに視、空を物語の作 者のやうに宇宙的な大きな 愛の魂でうへなひ、或ひは 戦死武者の靈を形はうとし 或ひは「木曾と申す武者死 に侍りけり」なとつぶやい ては人知れず痛哭した。そ して彼等は歌を遺とし、三 味の行として唯美の殿堂へ と浄土教の人々とは全然別 な意味の「いせき」の言葉と なへ合つたのである。

— 日本歌人新人十人集 —
夫 實 池田 山口 道 夫 天流 悲遠
くれないの歌風を兩断する二新人の田録。
希望者は直接著者へ、又はくれない発行所へ申込乞ふ。
日本歌人叢書 京都市島九五條下ル
定價 ¥200 國際文化協會出版部

歌 信 田 中 克 己

ししまの和の國に三年住み語りもあえて別來にける
さざなみの志賀の山々もみちして歌つくるべく眠らせぬ夜
戦ひの火中に妻子のこし來て銃とるひまを哭きしわれか
あかあかとあだの焚く火を見やりつゝ人殺さじとわれは誓ひし
さざなみの社のほとり伊吹嶺の降り來る雪に埋もれむ戸を
(堀内氏一首)

長崎旅情(その四) 山 口 實

白きマリアの御眼に見られて窓の邊にしはぶきにけるときのかなしさ
草はらに山羊をみたりきか山の羊もアンジェラスの朝の鐘ききけり
晚餐の最中に立ちてひとりひとりの御弟子の足を洗ひたまひき
浦上のくもりの空はくればしづみ風もたえたる丘のしづかさ
ゆるらんと夕靄のなかに落ちゆくゆるゆるなき日のくれなるや
冬の月やてくまなく照れる夜の夜支丹坂の石のうえをゆく
いくたびも見し記憶あるならむ壁面の鏡にうつる夜のともしび

愛 憎 白 須 義 和

衣引の襟に愛着限りなしわれの右手に煙草はたち盡き
翅白き蜻蛉と秋陽の中にある吾が愛憎のつきざる日なり
わが過去の悔のあまたをかなしみつつ秋陽の中を往きまごりする。
ぞす黒いみぞれの降りし午后なれば生きねばならぬと切に希へる
わが部屋に酸欠乏しくなりゆきてそのまゝ死ぬる気どりに夜か
なきがらと希みはなく灰色の原野の霧につつまれてぬ
わが肺の音かなしくもなりひびくそぞろ寒さに冬を迎ふる
ねばねばの妖花の蜜に近寄れば知性も意志も溶けてゆくなり
手や足や頬や胸にまつはりし街の夜霧に喘ぎてゐたる
穗芒の劍のごとききらめける夕暮なれば何をいひのらむ
赤錆びて捨てられてある空籬に雪ひとしきり降りつもるなり

心を正す歌 吉 田 辰 雄

さびしかる意志を抱きて迫る友あれと希ふは弱き心か
雲低きざどろの道越したれば決然としてころひらめかす
思惑を抱きしめつつ領くは油断しがたきわが暗なる
母にも言はぬあめ美しい思惑を抱きしめぬはうれしきろかも
小氣味よく疲れし夜はうなだれて何も考へぬ時をしつらむか
空 水 岸 田 エ ミ
我が濡れ手忘れて友を迎へつつ澄みきつた眸に見入りけるなり
野良に來て沈む夕日をたのしめりなれば百姓に親しめざれば
冬早き山に枯れゆく木がありぬもう永久に茂ることなげむ

露 台 新 井 康 彦

秋の夕べは冷めて西もなほ暮れやすかつた、暮れやすかつた。
何ゆゑに物も思はず、おまへの添に寄りつてゐたのであらう
なにか手さぐる淡い姿が、おまへの黄金のやうで悲しかった。
なのになぜ、紅の激しい血潮にむせぶ心持がしたのであらう。
再びみたばい、おまへは誘ふ麗の淵のやうに僕を手になした。
やがて眼ふさいで墮ちゆく先は、言はずに知れた地獄とならう。
それでも地獄に行きついたら、それだけに済んでしまつた。
安らかに、あゝおまへは冬に流れて喜ぶだらう。
いま見れば、樹さへ夕べは冬に向き、冬に向き
黄いろく冷えた葉を降らし、— おまへも僕も
疑へないで知ることだらう。昨日のやうに明日を來る日も……

青 丹 難 波 礼 二

われをなほみちびく如く春日なる三笠の山の黄葉のゆれ
常にして人見つらむかこの山のくらし楓とあかきいてふと
澄みきりし天にかたむきつききたる三笠の山の秋のいろはや
あまねくも日の光りさし三笠山すでに高きにわれはいま居る
世のつねの石に似つれど紅葉につつまれてゐるつひのしづかさ
おぼしき高きによりて遠山に白雲うつつるしづけさ見たり
気安くも天はてしに白き雲ながるるを見てこころ足らばは
陽をうけし山のかなたへ白き雲ながれ消えゆくとも飽かぬや
いまをわれ三つの聖に問ひてまし秋日ゆたかさにさしたるところ

kuunenai

55

寒林私語

池 埜 白 吉 池 堀 平 難 山 保
田 中 須 田 田 内 田 波 口 田
道 清 義 辰 道 民 信 礼 興
夫 市 和 雄 夫 一 子 二 實 重 郎

昭和二十六年二月一日發行
くねな
第五十五号
印刷所 株式会社朝日堂
印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町 吉川清司
發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二
くねなる發行所

島原より雲仙へ 山口 實

こがらしの音のこもるふ深谷に日の照るときの水を求めつしづかなる日に照らされし杉山に昨夜のあらしの雷は落つ峠にてかへりみすれば高山も低山も染めずには陽は雲に入る薬園をくだり来りて夕霧のながれるさむき島原を去る柿の太樹のかげにつながらる荒畑に音立ててけさは風ふきてぬ小松やま樹立のあひに照るみちの赤土いろにつづくは白き街道

青丹 (二) 難波 礼二

耐へ祈る炎のごときみ佛とおもふばかりに云ぞきはまる折伏のきはひするどき執金剛ややに間遠く見たりけるかも開扉してすなはちひらめくみ佛の千のみだれは吾になだりぬしづかなるこの堂ぬちにさほひます手菩薩の永久のかなしみ落漠の世にあかすや虚舎那佛いかにけ長き千とせなりけむ

北海 平田 信子

別れし母の姿のありありと目交にたちて侘しき日ぐれおほかたは眠りたるなりひた走る夜汽車の響かなしきまでに目をとちて夜汽車のひびき聴きて居りいづこの土地を走れるやらむ大きなる声に目ざめぬ窓の外は深々と白く雪つもりたる夜の駅に停車せし時揃ひきて北國の雪をなつかしみたり北の海が戀しかりけり近しとよ進む線路の眞白なる雪世俗を超えし三味の業はきびしけれ墨染のいのち尊くも見ゆうら若き墨染衣にふりかかる北國の雪の哀れさ思へりま白なる雪にひびかせ朝夕をつく鐘の音の清しとおもへみぞれする夕ぐれの海に漂ひて浮き沈みせるに海鳥のむれ波荒き海の彼方に連なれる山なみ白し白馬も見ゆ

寒林私語 (二の下) 池田 道夫

……即ちあそびそのものに永遠の理法を想つたのである。彼等はいつまでも古今を慕ひ、源氏を想つて再び理法と言へば、やや固く彼等——即ち悲劇の底に自らを見出したインテリゲンチヤの、終に今つせみを賭して筆を上げた世界であつた。彼等の心の中には父祖傳來の王朝藝術の夢が紅々と流れてゐた。彼等の父祖の時代には、即ち古今や源氏物語の時代には、それは決して夢としての形ではなく現実の世界として彼等を取りまいてゐた。彼等の父祖はその中で自由の翼をばたかせた。又自らの悲しみに酔ひしれてはさうではなかつた。世には戦塵が夜もなほ月をかくし、夜は屍と共に散りこぼれてゐた。都を吹の無常の嵐は、人々に浄土欲求の心をかきたせた。しかもなほ彼等の心の中には王朝の夢が流れてゐた。豪華なあ

辛卯歲旦吟 保田 重郎

ぬめぬめと頬にまつはるは髪毛の織きかあらず秋の夜の霧すゞるなり寂しつめたき御像これや花にもたとへし君かボケットの林檎一つが生きもの如く冷たく指さきに觸る寒き雲閉ざしつある山のいろはふかしくおもはへなく人間のかなしき性か相觸れて君が胸血もさわぎたるらめあかなくかく歩きけむおろか人慮しき涯を一鳥と過ぐ天地の大き御父とおもふにも朝は冷たき陽のさしてゆく降りしける雪雪花の中に立つこの虚しさもやがて耐ふべき傷心の果に灯せる赤き火も荒れたる山野の冬は凍りぬ散らばれる火層を集めぬるこの事が昨日の如き錯覚なりけりさびしらにのませる母に雪の夜のわれの嘆きは語らずおかな

浮沈 難波 礼二

……評に對して、明確な解答を谷山茂氏の「新古今和歌集の歌人」から参考までに引いておかう。(定家)最勝四天王院障子歌(承元二年)中の一首「秋とだに吹きあへぬ風に色かたはる生田の杜の露の下草」といふ歌が入選しなかつたといつて「種々の過言」を吐き散らしたといふことである。後鳥羽院は、この歌を評して、「優なる歌の本体」ではあるが、よくよく

奴風 瑩 中 清市

奴かへど術なけれ國の安危にかかはれる春のはじめぞ獨り酔ひつ舞ひ上るやつこ風をひくわがよるこびの春のかがやき抱き上ぐる子は萬歳を叫ぶなり陽の新玉の空にのぼればくる年もくる年も吾は古下駄を潔よしとしてゐるにあらねどめでたしと或ひは云へりうら白を吹く朝風のすがしと思へば何事を吾は念すべき手を合せ父のしぐさを倣ふ子のためひと度はそも美しき世もあれと念する程はさびしかりしか何がなし年のはじめは己が身につまざる思ひなしと云はなくなかなしみの窮まるはると涙潤れふくらみし梅の蕾見てあつ北風のすさび荒ぶる黄昏やほろびし軍歌口ずさみみろ

春戀 池田 道夫

心ゆくまで染まりたりし夕雲はやすらかに消えゆきにけむ皎々と月さえて天の遠ければ飛天も重しその肉体の中天にかぎりなく小さき月光るこの憎しきは永久の憎しみ明日の日をここに凝視めてむなしさよ土にうすづく名残のひかり青光る地球のはてをひた走ら髪は水のごとく心氷の如しさびさびと急ぎてゆけばわが駒のひづめにひびき散る春のはな面影をうち沈めてたゆたへば水邊はみどり花散りてくれ

風雲 吉田 辰雄

まんじゆしやけ遠くつづける土堤沿をふりむきもせで行きし人かも寒そうに沖をみつめる人ありてこの二月はいよいよ深き一めん谷のうらじろさはさはと日ぐれの風にゆれるたりけりものなべて傾きければ哀しきも翳は支よりながくのびぬるあさあさの晴れわたたりたる冬空を心ゆくまで仰ぎたるかもみだれ雲ゆき交ふ空にくれゆきし長き裸木がころろに残る唇かみてうつつむきかけんにゆく我にやさしきものはかけばかりなる

雪原 白須 義和

こんな日がなほ續くかと思ひつたた雪雲のゆきき見てあつ夕べ雪原となりてより悲しきことなどは云はずと決めぬかつての日君と見にける青芝の雪原となる日も近からむ肺までも碧みゆくなる秋空に鴉群れゆく吾はひとりなればつつましく家にもこもれる朝夕の山住みの餉はたのしかりけり

春戀 池田 道夫

心ゆくまで染まりたりし夕雲はやすらかに消えゆきにけむ皎々と月さえて天の遠ければ飛天も重しその肉体の中天にかぎりなく小さき月光るこの憎しきは永久の憎しみ明日の日をここに凝視めてむなしさよ土にうすづく名残のひかり青光る地球のはてをひた走ら髪は水のごとく心氷の如しさびさびと急ぎてゆけばわが駒のひづめにひびき散る春のはな面影をうち沈めてたゆたへば水邊はみどり花散りてくれ

春戀 池田 道夫

心ゆくまで染まりたりし夕雲はやすらかに消えゆきにけむ皎々と月さえて天の遠ければ飛天も重しその肉体の中天にかぎりなく小さき月光るこの憎しきは永久の憎しみ明日の日をここに凝視めてむなしさよ土にうすづく名残のひかり青光る地球のはてをひた走ら髪は水のごとく心氷の如しさびさびと急ぎてゆけばわが駒のひづめにひびき散る春のはな面影をうち沈めてたゆたへば水邊はみどり花散りてくれ

風雲 吉田 辰雄

まんじゆしやけ遠くつづける土堤沿をふりむきもせで行きし人かも寒そうに沖をみつめる人ありてこの二月はいよいよ深き一めん谷のうらじろさはさはと日ぐれの風にゆれるたりけりものなべて傾きければ哀しきも翳は支よりながくのびぬるあさあさの晴れわたたりたる冬空を心ゆくまで仰ぎたるかもみだれ雲ゆき交ふ空にくれゆきし長き裸木がころろに残る唇かみてうつつむきかけんにゆく我にやさしきものはかけばかりなる

雪原 白須 義和

こんな日がなほ續くかと思ひつたた雪雲のゆきき見てあつ夕べ雪原となりてより悲しきことなどは云はずと決めぬかつての日君と見にける青芝の雪原となる日も近からむ肺までも碧みゆくなる秋空に鴉群れゆく吾はひとりなればつつましく家にもこもれる朝夕の山住みの餉はたのしかりけり

奴風 瑩 中 清市

奴かへど術なけれ國の安危にかかはれる春のはじめぞ獨り酔ひつ舞ひ上るやつこ風をひくわがよるこびの春のかがやき抱き上ぐる子は萬歳を叫ぶなり陽の新玉の空にのぼればくる年もくる年も吾は古下駄を潔よしとしてゐるにあらねどめでたしと或ひは云へりうら白を吹く朝風のすがしと思へば何事を吾は念すべき手を合せ父のしぐさを倣ふ子のためひと度はそも美しき世もあれと念する程はさびしかりしか何がなし年のはじめは己が身につまざる思ひなしと云はなくなかなしみの窮まるはると涙潤れふくらみし梅の蕾見てあつ北風のすさび荒ぶる黄昏やほろびし軍歌口ずさみみろ

辛卯歲旦吟 保田 重郎

ぬめぬめと頬にまつはるは髪毛の織きかあらず秋の夜の霧すゞるなり寂しつめたき御像これや花にもたとへし君かボケットの林檎一つが生きもの如く冷たく指さきに觸る寒き雲閉ざしつある山のいろはふかしくおもはへなく人間のかなしき性か相觸れて君が胸血もさわぎたるらめあかなくかく歩きけむおろか人慮しき涯を一鳥と過ぐ天地の大き御父とおもふにも朝は冷たき陽のさしてゆく降りしける雪雪花の中に立つこの虚しさもやがて耐ふべき傷心の果に灯せる赤き火も荒れたる山野の冬は凍りぬ散らばれる火層を集めぬるこの事が昨日の如き錯覚なりけりさびしらにのませる母に雪の夜のわれの嘆きは語らずおかな

浮沈 難波 礼二

……評に對して、明確な解答を谷山茂氏の「新古今和歌集の歌人」から参考までに引いておかう。(定家)最勝四天王院障子歌(承元二年)中の一首「秋とだに吹きあへぬ風に色かたはる生田の杜の露の下草」といふ歌が入選しなかつたといふことである。後鳥羽院は、この歌を評して、「優なる歌の本体」ではあるが、よくよく

寒林私語 (二の下) 池田 道夫

……即ちあそびそのものに永遠の理法を想つたのである。彼等はいつまでも古今を慕ひ、源氏を想つて再び理法と言へば、やや固く彼等——即ち悲劇の底に自らを見出したインテリゲンチヤの、終に今つせみを賭して筆を上げた世界であつた。彼等の心の中には父祖傳來の王朝藝術の夢が紅々と流れてゐた。彼等の父祖の時代には、即ち古今や源氏物語の時代には、それは決して夢としての形ではなく現実の世界として彼等を取りまいてゐた。彼等の父祖はその中で自由の翼をばたかせた。又自らの悲しみに酔ひしれてはさうではなかつた。世には戦塵が夜もなほ月をかくし、夜は屍と共に散りこぼれてゐた。都を吹の無常の嵐は、人々に浄土欲求の心をかきたせた。しかもなほ彼等の心の中には王朝の夢が流れてゐた。豪華なあ

島原より雲仙へ 山口 實

こがらしの音のこもるふ深谷に日の照るときの水を求めつしづかなる日に照らされし杉山に昨夜のあらしの雷は落つ峠にてかへりみすれば高山も低山も染めずには陽は雲に入る薬園をくだり来りて夕霧のながれるさむき島原を去る柿の太樹のかげにつながらる荒畑に音立ててけさは風ふきてぬ小松やま樹立のあひに照るみちの赤土いろにつづくは白き街道

青丹 (二) 難波 礼二

耐へ祈る炎のごときみ佛とおもふばかりに云ぞきはまる折伏のきはひするどき執金剛ややに間遠く見たりけるかも開扉してすなはちひらめくみ佛の千のみだれは吾になだりぬしづかなるこの堂ぬちにさほひます手菩薩の永久のかなしみ落漠の世にあかすや虚舎那佛いかにけ長き千とせなりけむ

北海 平田 信子

別れし母の姿のありありと目交にたちて侘しき日ぐれおほかたは眠りたるなりひた走る夜汽車の響かなしきまでに目をとちて夜汽車のひびき聴きて居りいづこの土地を走れるやらむ大きなる声に目ざめぬ窓の外は深々と白く雪つもりたる夜の駅に停車せし時揃ひきて北國の雪をなつかしみたり北の海が戀しかりけり近しとよ進む線路の眞白なる雪世俗を超えし三味の業はきびしけれ墨染のいのち尊くも見ゆうら若き墨染衣にふりかかる北國の雪の哀れさ思へりま白なる雪にひびかせ朝夕をつく鐘の音の清しとおもへみぞれする夕ぐれ

寒林私語 (二の下) 池田 道夫

……即ちあそびそのものに永遠の理法を想つたのである。彼等はいつまでも古今を慕ひ、源氏を想つて再び理法と言へば、やや固く彼等——即ち悲劇の底に自らを見出したインテリゲンチヤの、終に今つせみを賭して筆を上げた世界であつた。彼等の心の中には父祖傳來の王朝藝術の夢が紅々と流れてゐた。彼等の父祖の時代には、即ち古今や源氏物語の時代には、それは決して夢としての形ではなく現実の世界として彼等を取りまいてゐた。彼等の父祖はその中で自由の翼をばたかせた。又自らの悲しみに酔ひしれてはさうではなかつた。世には戦塵が夜もなほ月をかくし、夜は屍と共に散りこぼれてゐた。都を吹の無常の嵐は、人々に浄土欲求の心をかきたせた。しかもなほ彼等の心の中には王朝の夢が流れてゐた。豪華なあ

辛卯歲旦吟 保田 重郎

ぬめぬめと頬にまつはるは髪毛の織きかあらず秋の夜の霧すゞるなり寂しつめたき御像これや花にもたとへし君かボケットの林檎一つが生きもの如く冷たく指さきに觸る寒き雲閉ざしつある山のいろはふかしくおもはへなく人間のかなしき性か相觸れて君が胸血もさわぎたるらめあかなくかく歩きけむおろか人慮しき涯を一鳥と過ぐ天地の大き御父とおもふにも朝は冷たき陽のさしてゆく降りしける雪雪花の中に立つこの虚しさもやがて耐ふべき傷心の果に灯せる赤き火も荒れたる山野の冬は凍りぬ散らばれる火層を集めぬるこの事が昨日の如き錯覚なりけりさびしらにのませる母に雪の夜のわれの嘆きは語らずおかな

浮沈 難波 礼二

……評に對して、明確な解答を谷山茂氏の「新古今和歌集の歌人」から参考までに引いておかう。(定家)最勝四天王院障子歌(承元二年)中の一首「秋とだに吹きあへぬ風に色かたはる生田の杜の露の下草」といふ歌が入選しなかつたといふことである。後鳥羽院は、この歌を評して、「優なる歌の本体」ではあるが、よくよく

奴風 瑩 中 清市

奴かへど術なけれ國の安危にかかはれる春のはじめぞ獨り酔ひつ舞ひ上るやつこ風をひくわがよるこびの春のかがやき抱き上ぐる子は萬歳を叫ぶなり陽の新玉の空にのぼればくる年もくる年も吾は古下駄を潔よしとしてゐるにあらねどめでたしと或ひは云へりうら白を吹く朝風のすがしと思へば何事を吾は念すべき手を合せ父のしぐさを倣ふ子のためひと度はそも美しき世もあれと念する程はさびしかりしか何がなし年のはじめは己が身につまざる思ひなしと云はなくなかなしみの窮まるはると涙潤れふくらみし梅の蕾見てあつ北風のすさび荒ぶる黄昏やほろびし軍歌口ずさみみろ

春戀 池田 道夫

心ゆくまで染まりたりし夕雲はやすらかに消えゆきにけむ皎々と月さえて天の遠ければ飛天も重しその肉体の中天にかぎりなく小さき月光るこの憎しきは永久の憎しみ明日の日をここに凝視めてむなしさよ土にうすづく名残のひかり青光る地球のはてをひた走ら髪は水のごとく心氷の如しさびさびと急ぎてゆけばわが駒のひづめにひびき散る春のはな面影をうち沈めてたゆたへば水邊はみどり花散りてくれ

風雲 吉田 辰雄

まんじゆしやけ遠くつづける土堤沿をふりむきもせで行きし人かも寒そうに沖をみつめる人ありてこの二月はいよいよ深き一めん谷のうらじろさはさはと日ぐれの風にゆれるたりけりものなべて傾きければ哀しきも翳は支よりながくのびぬるあさあさの晴れわたたりたる冬空を心ゆくまで仰ぎたるかもみだれ雲ゆき交ふ空にくれゆきし長き裸木がころろに残る唇かみてうつつむきかけんにゆく我にやさしきものはかけばかりなる

雪原 白須 義和

こんな日がなほ續くかと思ひつたた雪雲のゆきき見てあつ夕べ雪原となりてより悲しきことなどは云はずと決めぬかつての日君と見にける青芝の雪原となる日も近からむ肺までも碧みゆくなる秋空に鴉群れゆく吾はひとりなればつつましく家にもこもれる朝夕の山住みの餉はたのしかりけり